

本編⑫「第一大『犍度（体系的にまとめたもの）』」を読んでみる？2020.9.19

○大犍度が十章。小犍度が十二章。律の親玉・大犍度第一章を勉強してみよう。

具足戒の第一項目が制定されるときと同様に、大犍度の第一章にも、比丘サンガの運営システム（犍度 *khandha-ka*）を定めることになるまでの経緯が仏教の歴史として説かれる。それも含め、しかも、サンガでの日常いつも大事な普段からの犍度（システム）がとりあえず全部組み込まれているので、名前は「大犍度」。主な内容は、出家の許可と和尚 *upajjhāya*・師匠 *ācariya* を決めること。

（藤本は和尚・師匠の制度についても順番にじっくり読んでみたい。なぜなら、）

○パーリ聖典では、説かれる順番にも大いに意味がありそう。

パーリ聖典の順番では、経・律・論の三蔵ではなく**律・経・論**の三蔵。）

さすがにサンガの成立（律）より先に教え（初転法輪・経）があったけど、、、パーリ聖典では律の方が経より大事だということ。

律の中でも個々の戒律項目より先に「犍度」が説かれる。

（和訳『南伝大蔵経』は逆[犍度が後]。なぜかパーリ律蔵の註釈も聖典と逆に犍度が後！）

→歴史的にも個々の戒律項目より先にサンガの運営方針が次々制定された。

※というわけで、長いけど、まず、「第一大犍度」を読んでからの方が、その他の個々のものごとに対応しやすいと思いました。お付き合いください。

◎成道後の（7×7=49日）間

①菩提樹下で結跏趺坐し、七日間、解脱の楽を感受 *vimuttisukha-paṭisaṃvedī*。

最初の夜の初夜（18:00～22:00）に十二因縁を順逆に作意する *manasākāsi*。

「悟りとは十二因縁である」×。悟った後で十二因縁で説明。他にも。

ウダーナ（自頌）も唱えた。

（②③④は註釈より。「寝ず、語らず、この三つの七日間は菩提樹の傍にいた。」）

②釈尊がブッダと成って一週間、禪定に入ったまま立たない間に、一部の天人たちがブッダたることとはどういうものかと疑問を持つようになった。

釈尊は第八日目に禪定から立ち、一部の天人たちの疑問を知って、虚空に上がり、双神変を見せて彼らの疑いをなくしてやってから、少し東に依って *isakaṃ pācīnanissite* 北方向に立って *uttaradisābhāge thatvā*、四十万阿僧祇劫に渡って積んだ波羅蜜行の果報の証得が衰亡することなく *phala-adhigama-na-naṭṭhānaṃ* 結跏 [跏趺坐における悟りとして現れたその悟りを支えた] 菩提樹を瞬きしない両目で見つめながら [第二の] 七日間を

過ごした bodhirukkhaṃ ca animmisehi akkhīhi olokayamāno sattāhaṃ vītināmesi。その場所には「瞬きしない霊地」という名前がついた。

③さて、[悟りを開いたとき] 結跏趺坐していた処と [菩提樹を見つめるために] 立っていた処との間を行ったり戻ったりして「宝の経行処」で経行しながら [第三の] 七日間を過ごした pallaṅkassa ca thitaṭṭhānassa ca antarā puratthimato ca pacchimato ca āyate ratanaṅkame caṅkamanto sattāhaṃ vītināmesi。その場所には「宝経行霊地」と名前が。

④それから、西の方向に **pacchimadisābhāge** 天人たちが宝の家を作り、そこに結跏趺坐で座って、アビダンマ蔵を特にここで、あらゆるやり方ですべての発趣（始まり）を考察しながら **ananta-naya-samantapaṭṭhānaṃ vicinanto** 七日間を過ごした。その場所は「宝の家霊地」と名前が。

このように菩提樹の傍で四つの七日間を過ごしてから、第五の七日では……

⑤三昧より起ち、菩提樹下から出て、(菩提樹の東側にある **puratthimadisābhāge**) アジャパーラニグローダ樹の下に赴き、アジャパーラニグローダ樹の下で結跏趺坐し、七日間、解脱の楽を感受。

一人のフンフンと鼻を鳴らす(傲慢な)性質の **huhuṅka-jātika** バラモンが来て挨拶して、歓談して、一方に立って、釈尊に「何によってバラモンたるや？」と問うた。釈尊の答え(寝ていないけどここで他者と話した)：

「バラモンで、悪法を除き **bāhitapāpadhammo** 傲慢でなく **ni-huhuṅko**、汚れなく **ni-kasāvo**、自ら制御し **yata-attan**、ヴェーダに通じ **vedanta-gū**、梵行を完成していれば、そのバラモンはバラモンだと言えます。世の中にそんな人は多くないでしょうけど。」

⑥三昧より起ち、アジャパーラニグローダ樹下から出て、ムチャリンダ樹、、、結跏趺坐、、、七日間、、、。ムチャリンダ樹は大菩提樹の東のコーナー **pācīnakone**。その七日間は時ならぬ大雲が起こり、雨が降り続いて寒かった。ムチャリンダ龍王が自分の住処から出てとぐろで釈尊の身を七重に巻き、首を上げて釈尊の頭上を覆った。「寒さも熱さも虫も風も触れて世尊を害するなかれ」と思って。

七日後、雨が止んだのでとぐろを解いて少年の姿になり、合掌して立った。ウダーナ(自頌)を唱えた。

⑦三昧より起ち、ムチャリンダ樹下から出て、ラージャーヤタナ樹、、、。

(ラージャーヤタナ樹は大菩提樹の南の方向に **dakkhiṇadisābhāge** 立っていた。

天界の王サッカは釈尊がそろそろ食事すべきと思い、薬草とカシの実 **osadhaharītaka** をお布施した。それを召し上がって身体の機能 **sarīrakicca** があり、口を漱ぐ水をサッカが与え、それで口を漱ぎ、それからラージャーヤタナ樹の下に結跏趺坐した。)

そのとき、タプッサとバツリカの二人の商人 **vāṇija** がウッカラ村からこちらに向かっていて。この二人の前世で親族だった天人が教える：「世尊が[この世で] 最初の正覚者 **paṭhamābhisambuddho** (現等覚) と成り、ラージャーヤタナ樹の下におられる。行って、麦菓子 **mantha** と蜜の塊 **madhupiṇḍika** をもって供養しなさい **paṭimānetha**。お二人に長く利益となるでしょう。」
 そのとおりに釈尊の前に出て、「私たちの利益のためにお受けください」と。釈尊は考えた：「如来たるものは手では受けない。何[の器]で受けようか」。四天王がその意を知り、四方から四つの石鉢を献じた。

(最初はサファイア **indanīlamanī** 製の鉢を献じたが受け取ってもらえず。四つとも受けたのは多欲の故ではない。実際、四つの鉢は釈尊が受けて一つになった。)

その鉢を受け、それで商人たちからの食物を受けた。

釈尊が食し終え、鉢と手を洗い終わったところで、頭を両足に着け：

「私たちは世尊と法に帰依します **ete mayam bhante bhagavantam saraṇam gacchāma dhammañ ca**。世尊は、私たちを在家信者としてお認めくださいますように **upāsake no bhagavā dhāretu**。今日より命終わるまで帰依します **ajjatagge pāṇupete saraṇam gate**」。

二人は二帰依を唱えた最初の在家信者となった **teva loke paṭhamam upāsakā ahesum dhevācīkā**。

(「今や、何を今日から我々の礼拝する対象 [礼拝・迎え] **abhivādana-paccuṭṭhāna** とすべきでしょうか」と問われ、釈尊は頭を触り、髪を手にとった。彼らにそれを与えて「これを持って行きなさい [お世話しなさい] **pariharatha**」と。彼らは髪という印 **kesadhātuyo** を得て、不死の灌頂を受け **amatena abhisittā**、大喜び・大満足で **haṭṭha-tuṭṭhā** 礼拝して立ち去った。) →まだ「ご利益・拝み教」信者。教えを受けたわけではない。